教育部総務課
令和４年６月30日(木)

これからの学校づくり第５回検討委員会 話し合い（ワークショップ）まとめ
＜Ａ班＋Ｂ班＋Ｃ班　キーワードのみ＞

テーマ①　「自分には良いところがある」と回答する子どもが少ない

１．家庭：役割、核家族化（他人のことを考える機会少ない）、目標設定、褒める、達成感、家族団らん（の時間減少）

２．学校：小中の連携、異年齢集団、学力や運動能力だけで評価しない学校、教科担任制の充実、小学校、中学校の良さを共有（高学年が低学年に対し規範と慣れる環境作り）、達成感を味わう授業、教員の増員（ゆとり）

３．地域：地域の行事、地域と学校の連携、社会性を身につける、町会が学校へ、「町会」・「個」・「学校」が一体となる、コミュニティの連携、「分団」の存在（上級生が下級生の面倒を見ていた）、地域における自分の役割、地域が自信を持つ場、地域で褒められる経験も大切、子ども会の存在（小１から高３まで）、学校で評価されない子を地域（子ども会等）で補完、世代間交流、スクール児童館に教員がきて子どもを見てもらい情報共有

４．全般：目標、認められる経験の積み重ねが大事、夢を持つ子が少ない、夢を持つことが重要、役割を与えると自分の存在感を感じられる（大沼岳陽学校の4-3-2制の例）、コミュにてースクールの効果的活用

テーマ②　ふるさと室蘭に愛着を持つ子どもが少ない

１．家庭：外遊び、一家団らん

２．学校：小中が連携して15歳の目指す姿を小中の先生が同じベクトルを向く、小中が一体となりふるさとむろらんへの愛着と誇りを持つ15歳を育成できる小中学校、小中で「むろらん学」を開設

３．地域：スクールバスで昔話、地元企業の人が授業、世代間交流、あいさつ、地域の人が学校に入る、体験学習を増やす、地域や企業見学機会の増、コミュニティスクールの早期立ち上げと学校との連携、カルチャーナイト、授業に地域の方を介入させる、子どもたちに地域で良い思い出を作らせ、郷土愛を育む

４．全般：市外へ出た人がむろらんの良さを言葉で発信してほしい

テーマ③　不登校児童生徒数が、全国に比べて多い

１．家庭：親の相談場所、親へのサポート、多様性を認める、オンラインによる教育、子どもに夢を持たせる

２．学校：異学年授業交流、小中協力体制、専門性の高い先生を配置、小学校で専門性の高い先生の授業を、小学校で担任以外も子どもたちを見られる環境構築、サポセンくじらんの役割大事
勉強以外の体験の機会、色々な選択肢を与えられる学校、色々な選択肢を与えられる学校、インクルーシブ教育（お金とマンパワー）、たくさんのめで子ど

もたちを見守り手をかける、中学校の先生がもっと小学校に入る

３．地域：叱ることができる社会、町会で保護者の悩み相談（学校や町会館で）、地域での不登校児童生徒の情報共有、あいさつが重要、地域とのつながりで救われる家族もある

４．全般：企業訪問（社会を知る、学校以外の選択肢の認知）、いろいろなコミュニティや活躍できる場の創出、学校の負担軽減、不登校の追跡調査、多様性、不登校に対する価値観を変える、ネット環境の活用

テーマ④　いじめの発生が、今も続いている

１．家庭：学校と連携しSNSの使い方に目を配る、メディアとの接し方

２．学校：先生が多く先生の目が行き届いた学校、上級生の見守り、異学年が相談に乗る、意見の相違を認めるような授業、小中の先生たちの交流

３．地域：コミュニティースクールを土台として学校と連携して登下校時や公園で子どもたちを見守る、地域の中で幼児期から様々な集団で生活する経験

４．全般：あいさつを教える、色々なコミュニティや活躍できる場の創出

教育部総務課
令和４年６月30日(木)

これからの学校づくり第５回検討委員会 話し合い（ワークショップ）まとめ
＜Ａ班＋Ｂ班＋Ｃ班＞

テーマ① 「自分には良いところがある」と回答する子どもが少ない

→キーワード：

１．家庭：役割、核家族化（他人のことを考える機会少ない）、目標設定、褒める、達成感、家族団らん（の時間減少）

２．学校：小中の連携、異年齢集団、学力や運動能力だけで評価しない学校、教科担任制の充実、小学校、中学校の良さを共有（高学年が低学年に対し規範と慣れる環境作り）、達成感を味わう授業、教員の増員（ゆとり）

３．地域：地域の行事、地域と学校の連携、社会性を身につける、町会が学校へ、「町会」・「個」・「学校」が一体となる、コミュニティの連携、「分団」の存在（上級生が下級生の面倒を見ていた）、地域における自分の役割、地域が自信を持つ場、地域で褒められる経験も大切、子ども会の存在（小１から高３まで）、学校で評価されない子を地域（子ども会等）で補完、世代間交流、スクール児童館に教員がきて子どもを見てもらい情報共有

４．全般：目標、認められる経験の積み重ねが大事、夢を持つ子が少ない、夢を持つことが重要、役割を与えると自分の存在感を感じられる（大沼岳陽学校の4-3-2制の例）、コミュニティースクールの効果的活用

【課題】・【解決策】

１．家庭

○学校と連携し意識的に役割を与える。

○核家族化（個）により、地域と関わる機会が少ない。他人のことを考える機会が少ない。

○家庭では日常的な目標を決めて褒める。ただ褒めるだけでは難しい。

○達成感を子どもたちに味わってもらう。

○核家族化が進み、祖父母からの良い伝統や良い言い伝えを得られないため、知識や優しさが減少している気がする。

○家族団らんの時間が少なくなっている。その顕著な例として、父親が家族団らんタイムにいないことが多いため野球のナイター中継が減少している。一緒にテレビを見なくても団らんのための時間を作っていくのが良い。

○最近は個人主義が強いため、近所の家族構成が分からないことが多い。そのため、あまり近所とのコミュニケーションの場がない。アプローチの仕方も難しい。自分みたいなおじさんが道をこどもに聞いても、不審者扱いされることが多い。

○知・徳・体のバランスが重要。個性のぶつかりが最近では少なくなった。一家団らんの時間も減ったが、父がいなくても家庭のルールを作って対処できるはず。

２．学校

○小学生と中学生が一緒に清掃等の活動ができる学校。
○毎日の授業づくりを、小中の良さを出し合い、話し合える学校
○小中の先生方がお互い交流できる学校
○縦割り、異年齢集団のある環境
○若い先生向けの YouTube の研修動画
○学力、運動能力だけで評価されない学校。家庭が前提
○魅力ある授業をするため教科担任制の充実を図る
○小学校、中学校の良さを共有し「低学年は高学年にあこがれを抱き」「高学年は低学年に対し模範となれる」ような環境を作っていく。
○「わかった」「できた」を実感できる、達成感を味わわせる授業。役に立っていると思える学校生活が大切
⇒「わかった」「できた」と思っても現状は最後にテストが待っている。別の良さを探して子どもにフィードバックする。
○子どもたちも年齢が上がると、大人に褒められることより周囲の友人にどう思われるかが重要となってくる。
○先生はこどもとの言葉のキャッチボールが必要だと思う。しかし先生に余裕がないので難しいと思う。先生を増やすとかして、子どもをみる時間を増やして欲しい。
○自己有用感を得られるためには、きらきら言葉をあえて使ったり、とにかく褒めたりすること、勉強以外のことを評価することが重要。
○学級担任が、指揮コンダクターして欲しい。リーダーシップを取ることでこども達が育つ。
○5 教科以外の授業の中で充実感を感じられるような授業を行う。
○教員のスキルを上げ、人数を増やし、先生方のゆとりを増やす

３．地域

○地域の行事に参加して、親以外の大人と交流することで社会性を学ぶ。
○学校内に町会の部屋を設ける。
○授業で町会活動に参加する。
○子どもたちがお祭りなど地域の文化を学ぶ。
○地域と学校が連携し、町会等の介入により子どもたちに社会性を身につけさせる（コミュニティスクール等）→人間関係が作れない
○昔は、「町会」・「個」・「学校」が一体となっていた。コミュニティの連携が解決策では。
○昔は「分団」があった。分団対抗の大会があったり、上級生が下級生の面倒をみたりしていた。今は学区が広域化することにより難しくなってきている。
○地域の子ども会では、子どもたちは地域での自分の役割を知っていて、勉強や運動が優秀でなくとも、地域が自信を持つ場となっている。学校以外の地域で褒められることも大切。

○こども会が、高校３年生から小学１年生までいるので、高学年から低学年を見守ることができている。この異世代交流を大事にしていきたい。
○親が子の情報が知らなさすぎであると思う。家族団らんの時間が取れていないのが原因かと思う。
○学校で評価されない子を地域（子供会等）で補完する。
○世代間交流
○スクール児童館に教員が来て子どもを見てもらう等の情報共有があっても良いのでは。

４．全般

○目標があれば、それに向かっていくことができ、達成することで肯定的になれる。
○今回の４つの項目の中では、一番の基盤で意欲やストレスへの耐性につながる。認められる経験の積み重ねが大切。
○最近のこどもの夢を持つ子が少ない。児童館で夢を聞くと、普通に生きることが夢という子がいるくらいで衝撃を受けた。
○色々な世代間交流が必要。地域の人と声を掛け合うことで、話すこと・聞くことのコミュニケーション能力向上のために重要。
○夢を持つことが重要。
○仕事役割の分担が必要。役割を与えると自分の存在感を感じられる。また、縦割りのつながりが重要。大沼岳陽学園も学年４－３－２としていたが、上手くまわっているようにみえた。
○自分らの地域から学校がなくなると、人々の心も町も寂れるため、最終的には学校の役割が一番重要。コミュニティースクールを効果的に活用し学校と連携を強化していくことが重要。
○地域の商店街が少なくなってきており、子どもたちとの接点が少なくなってきている

テーマ② ふるさと室蘭に愛着を持つ子どもが少ない

→キーワード：

１．家庭：外遊び、一家団らん

２．学校：小中が連携して15歳の目指す姿を小中の先生が同じベクトルを向く、小中が一体となりふるさとむろらんへの愛着と誇りを持つ15歳を育成できる小中学校、小中で「むろらん学」を開設

３．地域：スクールバスで昔話、地元企業の人が授業、世代間交流、あいさつ、地域の人が学校に入る、体験学習を増やす、地域や企業見学機会の増、コミュニティスクールの早期立ち上げと学校との連携、カルチャーナイト、授業に地域の方を介入させる、子どもたちに地域で良い思い出を作らせ、郷土愛を育む

４．全般：市外へ出た人がむろらんの良さを言葉で発信してほしい

【課題】・【解決策】

１．家庭

○外で遊ばせる→子ども達で勝手に地域の良いところを見つけてくる。地域を知ることができる

○一度室蘭を離れると良さがわかる。

○一家団らんの時間を持つ

２．学校

○小中９年間、15歳の目指す姿に向けて小中学校の先生たちが同じベクトルを向く

○小中が一体となり、ふるさと室蘭への愛着と誇りを持つ15歳を育てられる小中学校

○小中で「むろらん学」を開設

３．地域

○例えば、スクールバスの中で、大人が昔話をしてあげる

○地元企業の人が授業をする

○世代間交流

○あいさつ

○空き教室に地域の人が入り、休み時間に遊びに行ける場になれば。地域への愛情や誇りを持つ場ともなり得る。

○授業のカリキュラムの進行を速め体験学習を増やしたい、そのためには授業を早く進めて時間を作る必要がある。青健協など地域の方に授業に入ってもらいちょっとしたお手伝いをしていただくのも良いのでは。

○小さな頃から仕事を理解すること。カリキュラムの関係など、今は中々、地域や企業と繋がる時間がない。長期休業を利用するなど、地域や企業を見る機会を増やしては。

○コミュニティスクールを早く立ち上げる必要がある。地域が学校に入っていける。

○学校だけでは難しいが、地域もあまり期待されても大変。学校のセキュリティ問題等、実際はマッチングが難しい。
○カルチャーナイトの盛況により、地域に愛着がある方はいる。
○空き教室の利用等により授業に地域の方のを介入させる。
○後志管内にいた時は、こども達に地域で良い思い出を作らせて、郷土愛を育み人口流失を食い止めている。室蘭はまだそこまできていない。

４．全般

○市外へ出て行った人がきちんと室蘭の良さを言葉にして発信して欲しい。市外でに出た人はみな室蘭親善大使！

テーマ③ 不登校児童生徒数が、全国に比べて多い

→キーワード：

１．家庭：親の相談場所、親へのサポート、多様性を認める、オンラインによる教育、子どもに夢を持たせる

２．学校：異学年授業交流、小中協力体制、専門性の高い先生を配置、小学校で専門性の高い先生の授業を、小学校で担任以外も子どもたちを見られる環境構築、サポセンくじらんの役割大事
勉強以外の体験の機会、色々な選択肢を与えられる学校、色々な選択肢を与えられる学校、インクルーシブ教育（お金とマンパワー）、たくさんのめで子どもたちを見守り手をかける、中学校の先生がもっと小学校に入る

３．地域：叱ることができる社会、町会で保護者の悩み相談（学校や町会館で）、地域での不登校児童生徒の情報共有、あいさつが重要、地域とのつながりで救われる家族もある

４．全般：企業訪問（社会を知る、学校以外の選択肢の認知）、いろいろなコミュニティや活躍できる場の創出、学校の負担軽減、不登校の追跡調査、多様性、不登校に対する価値観を変える、ネット環境の活用

【課題】・【解決策】

１．家庭

○不登校の子だけではなく親の相談できる場所を作る。
○親へのサポート（くじらんサポートセンター）
○多様性を認める。
○オンラインによる教育
○子どもに夢を持たせる

２．学校

○異学年の授業に参加し交流を図る。
○現在よりも、もっと小中学校の先生たちが交流し、手を取り合える小中学校
○小学校で専門性の高い先生が教えてくれる環境。（授業について行けないことからの不登校対策）
○小学校では、担任だけでは無く多くの先生たちで子どもたちを見ることができる学校。
○サポートセンターくじらんでの親と子どもへのサポート

○多くの教職員による子どもへの見守り・サポート指導
○勉強だけではなく、勉強以外の体験の機会を作る。
○色々な選択肢を与えらる学校
○インクルーシブの拡大（教員等の研修機会）
○教員の増（増員により心のゆとりが必要）

○不登校といじめは相反している。不登校生徒が登校するといじめにあうことが多く、いじめられると不登校になる。これを改善するためには、やはり土台として人間性が重要。
○もう一つ不登校を減らす方法としては、発達障害の生徒が多いため、インクルーシブ教育の拡大が必要。特性を理解することにより確実に不登校は減らせる。ただ、お金とマンパワーが必要なことが課題。
○たくさんの目で見守る、手をかける
○中学校の先生が、もっと小学校に入った方がよい。

３．地域

○叱ることを是とする社会
○地域の人が地域で授業する。
○町会で保護者の悩み相談を実施する（学校や町会館で）
○地域でも不登校の子がいれば声をかけていけるよう情報共有できないか。声をかけるには大人側にも心に余裕が必要。
○町会等の地域で授業を行ったり保護者の悩み相談を行う。
○自己有用感と地域への愛情と誇りを持たすことで、自然と不登校・いじめは減少していくと思う。
○地域の人との交流。町内で大人と子どものあいさつが重要。これができると自分の立ち位置を知ることができるので、いじめ不登校は自然と減っていくと思う。
○地域とのつながりで救われる家族もある

４．全般

○色々な施設に子ども達で行けるような仕組み作りがあれば（例えば、バスのフリーきっぷだったり）
○例えば、学校に行けないなら、その日は企業に訪問してみても良いのでは（社会を知ることが出来るし、学校以外の選択肢にもなる）。大人は自分の意思で選択できるが、子どもは学校という選択肢しかなく、逃げ場がない（ストレス）。
○いろいろなコミュニティや活躍できる場がたくさんあると良い。子どもにとってチャンネルがたくさんあるという状況があれば。学校だけでは無理。学校が背負い込み過ぎて多忙にならないような仕組みが必要。
○不登校だったが大人になってからは就職しちゃんとやっていけているなら問題無いのでは。そのために不登校の追跡調査も必要では。基本は登校した方が良いとしても、今は多様性の時代。大検や通信制のＮ高など可能性は他にもある。寛容になっても良いと思う。
○昔の不登校＝引きこもりのイメージから今は少し変わってきている。価値観自体を変える必要がある。今は学び直しができる時代。ネット環境も解決の一つとなる。

テーマ④　いじめの発生が、今も続いている

→キーワード：

１．家庭：学校と連携しSNSの使い方に目を配る、メディアとの接し方

２．学校：先生が多く先生の目が行き届いた学校、上級生の見守り、異学年が相談に乗る、意見の相違を認めるような授業、小中の先生たちの交流

３．地域：コミュニティースクールを土台として学校と連携して登下校時や公園で子どもたちを見守る、地域の中で幼児期から様々な集団で生活する経験

４．全般：あいさつを教える、色々なコミュニティや活躍できる場の創出

【課題】・【解決策】

１．家庭

○保護者が何でも口を出しすぎている

○学校と連携し、SNSの使い方に目を配る

○メディアとの接し方を大人が学ぶ

２．学校

○先生が多くて、登校から下校まで先生の目が行き届いた学校

○道徳の充実

○異学年からの相談の日を設ける（同学年には言えないことも、年の離れた学年には言えたりする）

○上級生が見守る環境

○授業で考えが違う意見を認めることがいじめ防止への第一歩。これを小中で日々確認でき、小中の先生たちが交流できる学校が良い。

３．地域

○コミュニティスクールを土台に学校と連携し登下校時や公園で子どもたちを見守る

○地域の中で、幼児期から様々な集団で生活する経験を増やす。

４．全般

○何事もあいさつから始まる。近年は、校区が広がり、スクールバスで通う子どもが増えており、あいさつの機会（地域の人へのあいさつ）も少なくなってきている。きちんと教えることが大切。

○全国的に、色々と決められ画一的になりすぎている。もう少し、学校・地域・市教委での裁量をもてれば。

○いろいろなコミュニティや活躍できる場がたくさんあると良い。子どもにとってチャンネルがたくさんあるという状況があれば。学校だけでは無理。学校が背負い込み過ぎて多忙にならないような仕組みが必要。（再掲）